

## 2016 年春季特別講演 4 月 30 日 “Was Shakespeare a Papist?” 復習

2016 年、第一回は「シェイクスピアはカトリックか？」のタイトルによるお話でした。神父様は、昨年の講座において、シェイクスピアがカトリックであったことをシェイクスピア劇をじゅうたんに例えて証明されました。その意味で、講座二年目の第 1 回は、神父様の御研究の核心に触れるタイトルでございます。17 世紀後半のイングランド国教会司祭の Richard Davies は「シェイクスピアはカトリックとして死んだ」と記しています。神父様は、「シェイクスピアはカトリックとして死んだ」だけではなく、「カトリックとして生き、カトリックとして劇を書いた」と付け加えられ、さらに、「シェイクスピアは、一体どのようなカトリックだったのか？」というテーマを取り上げてお話してくださいました。この答えを得るには、伝記的なアプローチと作品研究からのアプローチがございます。神父様は、後者の作品研究のアプローチを用いて、答えを導き出されました。

シェイクスピアの時代、イングランド国教会の人々は、カトリック教徒を軽蔑的に“Papist”と呼ぶ一方、厳格な信仰からイングランド国教会の教義や礼拝儀式の改革を要求するプロテスタント一派に対しても軽蔑的に“Puritan”と呼んでいたのです。シェイクスピア時代のキリスト教の状況を、神父様は三つの“P”で要約されました。その“P”とは、ローマカトリック教徒を指す“Papist”、ルターの改革に沿う“Protestant”、カルヴァンが主張する厳格な聖書解釈から教義・礼拝様式の改革を求める“Puritan”の三つでございます。

エリザベス一世は、「宗教上の事柄の最高権は国家にある」というエラストゥス主義をとられました。エリザベス一世の時代、「国教会信徒は愛国者、カトリック信徒は反逆者」という見解が国内に浸透した時代でもあります。ただし、女王は、「復活祭にイングランド国教会の礼拝に参加すれば良い」との方針で、国民の心の奥の信仰にまで立ち入ることはなさらなかったのです。この状況の下で、イングランドの“Papist”（カトリック信徒）は、カトリックの信仰を持っていても国教会の礼拝に参加する“Church Papist”と、国教会の礼拝を拒む熱心な“Recusant”に分かれていました。シェイクスピアがどちらのカトリックであったかは、証拠がないのでわかりません。シェイクスピアの父親ジョンと娘スザンナは“Recusant”でした。神父様は、劇から判断する限り、シェイクスピアは“Papist”であると断言されました。

シェイクスピアにはプロテスタント的な要素がほとんどないという Cardinal John Henry Newman (1801-90) をはじめ、カトリックの雑誌 *The Rambler* の寄稿者でシェイクスピアの研究者 Richard Simpson (1820-76)、G. K. Chesterton (1874-1936) など、シェイクスピアがカトリックだったと考えています。

神父様は、シェイクスピアが“Papist”である証拠を、四つの観点から説明されました。ただし、2015 年、個別に作品を取り上げられたご説明と重複する部分がございますので、

簡単に要約するにとどめます。

#### 1. 聖母マリアのような女主人公。

『間違いの喜劇』のルシアーナから『テンペスト』のミランダに至るまで、シェイクスピアの女主人公は美しく神聖で賢明“fair, holy, wise”である上、聖寵“grace”あふれる女性、つまり、聖母マリアのように描かれています。セリフを例にとると、『オセロ』の女主人公デズデモーナを迎える際のカシオのセリフ“Hail to thee, lady! and grace of heaven”は天使祝詞を想起させ、しかも、“grace of heaven”という英語はカトリックのリームズ版聖書の文言にのみ記され、プロテスタント聖書にはございません。

#### 2. 好ましい修道士たち。

『ロミオとジュリエット』のロレンス修道士、『空騒ぎ』のフランシス修道士、『尺には尺を』のロドウィック修道士など、好ましい人物としてフランシスコ会の修道士が描かれており、シェイクスピア劇に登場するプロテスタントの聖職者の描写とは異なります。

#### 3. 『ハムレット』におけるイングランド国教会忌避。

『ハムレット』では、煉獄の存在、臨終の塗油の秘跡、死者への祈りを重んじるカトリックと、それらを否定するプロテスタントとが対比されています。“To be or not to be”の独白は、「レキュザント（国教会忌避者）が耐えがたき状況にじっと耐えるか、エセックス伯の乱のように迫害するエリザベス一世に力で立ち向かうか」の意味が込められているとの説明がございました。更に、ハムレットの最後のセリフの“wounded name”には、「反逆者の汚名を着せられたレキュザントの名誉回復」の願いが響いていると説明なさいました。

#### 4. 相続権排除を扱う三つの劇。

『リチャード二世』、『お気に召すまま』、『リア王』の三つの劇は、イングランドを追放されるカトリック信徒の境遇が描かれているとのご説明でございました。『リチャード二世』の退位させられた国王、一番カトリック的な『お気に召すまま』では、弟のフレデリックに追放されてアーデンの森に棲む公爵が登場します。“Arden”（アーデン）は、シェイクスピアの母方の苗字であり、Isabella Shakespeare が修院長だった Wroxhall Abbey を含むアーデンの森を連想させます。同時に、フランス北東部でベルギーに隣接する Ardennes(アルデンヌ)を想起させる地名でもあります。アルデンヌの近くには、イングランドで迫害されたカトリックが集った Douai(ドゥエー)があり、ドゥエーには Cardinal William Allen (1532-94) が創設した大学がございました。“as in golden world”と描かれているように、カトリックの若者が Allen が創設したセミナリオに集っていたのです。

『リア王』では、リア王がコーディーリアを、グロスター伯爵がエドガーを追放します。劇中、唯一明示される地名ドーヴァーでリア王がコーディーリアと再会する第四幕で、劇はハッピー・エンディングを迎えます。受難劇の順序が逆になった『リア王』では、復活

の喜びにあふれる第四幕の後、第五幕が御受難の悲劇となります。リア王は、ピエタ像を  
思わせるように縊死されたコーディーリアを抱いて登場し、劇は悲劇的結末を迎えました。  
『リア王』では受難劇の悲しみと喜びが逆転しています。この順序が正常に戻るのは、『ペ  
リクリーズ』以降のロマンス劇まで待つ必要があるとお話になりました。